2022年4月24日 復活節第2主日礼拝

メッセージ「イエス来ます トマスいます」　　岡嶋千宙伝道師

聖書 ヨハネによる福音書 20章 24−29節

良く言えば「印象」、「雰囲気」、「空気感」。悪く言えば「レッテル」、「ラベリング」、あるいは「決めつけ」。誰か他の人を、たとえば見た目、声質、身ぶりなど、目につくところだけで判断してしまう。あるいは、別の誰かから聞いた第三者についての話だけから、その人の人物像を描いてしまう……。わたしにはよくあります。後になって、交わりが多くなってみると、まるで違っていたということも。始めに抱いていた印象と異なることに気づければよいのですが、勘違いしたままで、互いの距離を縮めることなく、最悪の場合、関係が悪化して断絶する、ということもあります。その度に、「人間関係ってめんどくさい」と思うのですが、元をたどれば、自分が勝手に相手に対して抱いていたイメージ、印象、あるいはレッテルが原因。それを取り除けばいいのですが、なかなかに難しい。

聖書には 3000 人以上の登場人物がいると言われています。イエス、アブラハム、イエスの母マリアなど、よく知られている人物もいれば、名前すら思い出せないような、あまり知られていない人たちもいます。よく知っていると思っていたとしても、聖書の記述通りというよりも、その記述をもとに後の時代になってつけられたイメージ・印象の方が強く記憶に残る、ということもあります。実際にその人物の描かれている記述に触れてみると、「おや？ 何か違うのでは」と感じることもあります。本日の登場人物も、イメージ先行で知られている人物ではないかと思います。おそらく、本人にとってはあまり嬉しくないイメージで。イエスの弟子の一人、「疑いのトマス」と呼ばれている人です。イエスの復活を祝うイースターから一週間が経ちました。復活の喜びがまだ消え失せていないこの日だからこそ、復活のイエスに出会った本人、トマスの姿に着目してみたいと思います。「疑いの人」と呼ばれるトマスですが、なぜそう呼ばれるようになったのか。果たして、その呼び名は、妥当なのか。「疑いのトマス」というイメージが強すぎて、そのトマスに出会った復活のイエスが伝えるメッセージが、ぼやかされているのではないか。

死んだはずのイエスが、弟子の一人であったトマスのもとに現れて、「自分が復活したことを信じるように」と語った。本日の聖書箇所に記されている場面です。少し前から、簡単に話の流れを確認しましょう。イエスは死にました。正確には、殺された。十字架刑という処刑によって。なぜ処刑されたのかと言うと、イエスが当時の社会で、人々、特に権力を握っている人たちに嫌われるようなことをしたからです。権力者集団にとっては、自分たちの不利益になることを言ったり、行ったりするイエスの存在は、ものすごくやっかいだった。邪魔物イエス。だから、そのイエスを排除するために、十字架につけて殺した。死んで墓に葬られたイエス。数日後。イ

エスを慕っていた一人の女性、マグダラのマリアが墓を訪れてみると、様子がおかしい。イエスの弟子であった二人の人物を呼んで、墓の中を調べてもらうと、イエスの死体がなくなっている。遺体が誰かに盗まれてしまったのではないか。イエスが死んでしまったことだけでも悲しいのに、加えて、遺体がなくなったという事実が追い討ちをかける。深い悲しみに襲われるマリア。その彼女の前に復活のイエスが現れて語る。イエス復活の第一場面です。

続く、復活の第二場面は、そのマリアから、イエスが復活したということを伝え聞かされていたイエスの弟子たちが、家にとじ込もっていた時のこと。自分たちが従っていた主人が生き返ったという知らせを受けていた弟子たち。でも、彼らはその知らせに喜ぶのではなく、イエスを殺した人々に見つかることを恐れていました。イエスの弟子ということで、同じように処刑されるかもしれない。アジトに身を潜め、厳重に鍵をかけて、誰も中に入ってこれないようにひっそりと息を殺して生活していたある日。イエスが中に入ってきて、復活の姿を顕す。その姿を見て、弟子たちは喜びました。そして復活の第三場面が、本日の箇所です。先にイエスが弟子たちの前に姿を顕したとき、弟子の一人トマスはその場にいませんでした。他の弟子たちから、イエスが復活したことを聞いていたのですが、トマスは信じようとしません。自分の目で確かめるまでは、自分の手で、復活のイエスの身体に触れるまでは、決して信じないと言い張るトマス。ついにその時が訪れます。トマスの前に、イエスが姿を顕したのです。自分の目で、イエスの復活を目撃したトマスは、思わず声を上げました。「わたしの主、わたしの神よ」。トマスが復活を信じた瞬間です。

確かに、「疑い」という言葉が当てはまるような感じはします。25 節のトマスの言葉、「自分で確かめるまでは、絶対に信じない」。これ以前に、少なくとも 2 度、彼はイエスが復活したことを聞いています。一度はマリアから、二度目は他の弟子たちから。それなのに、「自分で確かめるまでは!」と言い張るその頑なさ。さらに、そんなトマスが実際に自分で確かめて信じるようになったその姿を見て、イエスが投げ掛けた言葉。29 節「あなたは私を見たから信じたのか。見ないで信じる人は幸いである」。トマスを批判しているようにも聞こえます。信仰の純粋さを説く聖書の他の箇所、たとえば「子どものような信仰を」と言われているマルコ 10 章 15 節（マタイ 19:13-15，ルカ 18:15-17）などと併せて読まれることによって、トマスは頑固なのだ、信仰心が足りないのだ、疑うばかりで信じようとしないではないか、と評価される。だから、「疑いのトマス」……。ですが、前のシーンを含めて、ヨハネが記すイエス復活の場面を良く読んでみると、疑ったのはトマスだけではないことが分かります。他の弟子たちも、イエスの復活をつまずくことなしに信じられたわけではありませんでした。彼らも、トマスと同じように、イエスが復活したことを、マリアから聞いて知っていました。しかも、そのうちの二人、ペトロともう一人の弟子は、イエスの遺体が墓からなくなっていることを自分の目で見ていたのであり、復活につながるヒントを得ていたのです。それにも関わらず、信じていません。疑っている

のです。そして、彼らが信じたのは、実際に復活のイエスに出会って、自分たちの目でその姿を見た後のことでした。20 章 20 節「（イエスは自分の）手と脇腹とをお見せになった。弟子たちは、主を見て喜んだ」。トマスと同じです。さらに、トマスの人物像、ということで言えば、「疑う」というのは、彼の一時の心の動き、トマスの全人格における一つの側面でしかありません。ヨハネ福音書の中で、トマスは別の二つの場面、イエスが生きていたときの場面（11：1-16、14：1-14）で登場するのですが、そのどちらでも、他の弟子たちが臆して言葉を発しないときに、率先してイエスとの対話を求めています。自分の考えを隠すことなく、正しいか間違いかを気にすることなく、素直に自分の思いをイエスに伝えるトマス。早とちり、勘違い、というところは、確かにあるのでしょう。けれども、それは、「疑い」ではありません。むしろ、純粋さという意味では、他の弟子たち以上に純粋に、イエスのことを信じて、率直にイエスとの対話を求めて、素直に自分の言葉を向けているのです。あるいは、だからこそ、なのでしょうか。見方を変えれば、物言わない弟子集団の中で、物言うトマスは、目立つ存在、特徴的な存在と写らなくもありません。穿った言い方ですが、浮いているのです。変わり者。

変わり者ということで言えば、ヨハネ福音書に描かれるイエスは、トマスだけではなく、多くの変わり者たちと交わっています。3 章、イエスに敵対する勢力であったユダヤの権力集団の一人であるニコデモとの対話。4 章、イスラエルの民が交わってはならないとされたサマリア出身の人で、しかも男性が一対一で対話をすることが禁じられていた女性とのやりとり。8 章、不倫の現場をとらえられた女性を中心にした場面。9 章、生まれつき目のみえない人とのやりとり。そして、20 章、さきほど見たマグダラのマリアとの対話。彼女・彼らが属する共同体の中では、少し変わった、特異な人とされている者たち。それぞれの背景には異なりがあるのでしょうが、その一人一人が、イエスとの対話相手となり、それぞれが、自分の思いを素直にイエスにぶつけているのです。それを受けるイエスは、彼女・彼らを拒否しません。対等な関係で、正面から向き合っているのです。周囲の人たちが、そんな人たちとは付き合うな、話をするな、と言う中で、イエスは、気にすることなく彼女・彼らと向き合い、言葉を交わすのです。おそらく、トマスも、弟子集団の中では、変わり者だったのでしょう。その変わり者であるトマスに、復活のイエスは語りかけたのです。トマスの思いを正面から受け止め、信仰へと導いたのです。トマスに変わったところがあるとすれば、それは、「疑いの人である」というところにあるのではありません。他の弟子たちもトマス同様に疑ったのであり、同様に疑いを経た後に、復活のイエスを信じるようになったのです。違いは、出会い方、信じるようになった経緯、道筋の違いです。イエスが初めて復活の姿を顕わにした場面。墓の前で泣き崩れるマリアに語りかけたシーン。ここでは、マリアが一人の時に、復活のイエスが現れています。これに対して、本日の場面では、トマスが一人の時ではなく、他の弟子たちに囲まれている中で、イエスは姿を顕しています。トマスが疑う姿は、

弟子たちに隠されていません。彼が自分の思いをぶつけたその言葉を、声を、他の弟子たちも聞いています。自分とは異なる仕方、異なる道筋で、トマスが復活のイエスを信じるようになったそのいきさつを、他の弟子たちは目撃しているのです。信仰に至る道は一つではない。異なる道があって良い。それぞれの道に優劣はない。どれか一つが正しくて、それ以外は間違い、ということは決してない。なのに、これでなければならないということが主張されたり、制度化されるようになるのであれば、それは、復活のイエスが示すものではなくて、人間の思いで勝手にそう判断されているだけのことなのでしょう。そしてそれは、いずれ、人々を狭い枠に押し込め、不自由な、息苦しい、命の流れの滞る状態へと閉じ込めてしまうことになります。人間が作る枠から、弟子たちが、そして、後世の人たちが自由になる。イエスの復活の力。それは、一人一人が、社会に蔓延る様々な制限の枠にとらわれずに、自分らしく、自由にそれぞれの命を輝かせ、生きていくための原動力。

2022 年。新型コロナウィルスの感染拡大によって発生し続ける様々な生きづらさ。止まることのない格差と分断。パレスチナ・イスラエル、イエメン、アフガニスタン、ミャンマー、あるいはウクライナ、など、世界各地で起こる紛争・戦争。その余波で、命の重みに対する片寄った見方が拡散しています。この世界を生き延びるために、日々の生活を維持していくために、狭い枠に閉じ籠らざるを得ない。これでなければ、このあり方でなければ、ダメだ。はびこる自国優先主義、民族意識、能率主義。社会全体の影響を受けてなのか、教会においても。「信仰の一致」という名目のもとに、一つの枠の中に集う人々を閉じ込めようとする。その枠でしか、教会は生き残ることができないという言説が、唯一の正解であるかのように高らかに叫ばれていく。この礼拝の仕方、この信仰告白、この聖礼典のあり方でなければダメだ。そこから外れることは、正当な信仰ではない。まるで、イエスが生きていた時代のようです。イエスが真っ向から否定したのは、生活の至るところに、細かい規則、細かい基準を設けて、人々を縛り上げていく、そんなあり方ではなかったのでしょうか。一息つく余裕のない息苦しさ。イエスは、そこに風穴を開けて、新たな命の息吹をもたらしてくれたのではないでしょうか。死の束縛を破り、復活したイエスは、わたしたちをがんじがらめの世界から解放してくれたのではないでしょうか。わたしたちがトマスを「疑いのトマス」というイメージに閉じ込めてしまうのなら、そのトマスを信仰に導いたイエスが、復活を通してもたらしてくれた力を否定することになります。そして、それは、復活に触れて救いのうちに生かされているわたしたち自身を再び狭い枠に閉じ込めてしまうことになります。復活の命に与っていながら、その命を蝕むことになります。だから、トマスを解放する。わたし自身を、隣にいるあの人を、解放する。命の流れを塞き止める様々な枠から、自由になる。そのために、一歩を踏み出していく。イエスの復活の力に導かれて。友の手をとって。神の愛に包まれて。今一度。